

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第20回:新春新作落語『次郎長三国志』

しばらくの間おつきあいを願います。しかし、えらいことでしたな。えらいこっちゃえらいこっちゃとは聞いてましたけど、まさかほんまにあいないことになるとは。2000年になった途端、突然、パソコンの電源は落ちるわ、電話は通じんようになるわ、水道はとまるわ、電車の脱線は相次ぐは、飛行機は墜落するわ、地震は起きるわ、津波は来るわ、大火事が起こるわ、ロシアと米国の大陸間弾道ミサイルのスイッチが勝手に入るわ、巨大UFOは出現するわ、シーズン中やないのに阪神は優勝するわ、シベリア奥地でパンダの大群が一億頭も発見されるわ……きわめつけは屈斜路湖にゴジラが出現したことですな。まあ、どれくらい大騒ぎですが、何もかも一日で片が付まして、おおむね平穏な新年を迎えられたのはありがたいこととおます。今年は辰年やそうで、威勢のええ、活気のある一年になってほしいもんですな。

さて、年末に阪急電車に乗ってますと、吊り広告に「大英語」という言葉が大きな字で書いてあるのが目にとまりました。「大英語」て何や？ 英語に大英語とか小英語とかあるんか。まあ、大乘仏教と小乗仏教があるくらいやから、英語でも、日本への伝わりかたで二種類あるんかもな、と思いながら、なおもその広告をよく見ると、その横に「大阪市」と書いてある。ほほお、大阪市が「大英語」を募集するんか、と思いましたが、家に帰ってよう考えてみると、「大阪市大英語」、つまり大阪市大(大阪市立大学)が英語学科の募集をするという広告やったんですな。その時、なぜかわたしの頭に「大前田英五郎」という言葉が浮かびました。大前田英五郎は幕末の有名な侠客で、おなじみの清水の次郎長伝にも、きたないやりかたをしたり数を頼んで横車を押したりする博徒が多い中、珍しくもののわかった大親分として登場

します。そんなわけで(どんなわけや)年末年始はずっと昔のばくち打ち、やくざのことを考えてましたんやが、タイミングよく1月2日に12時間時代劇「次郎長三国志」が放送になり、今年のトレンドは次郎長や！ ということで、落語「次郎長三国志」のはじまりでございます。

「こんにちは」

「おまはんかいな、こっちはいい。ま、あがんなはれ。……なんや、そこで何してんねん」

「今年は辰年やそうですさかい、ちょっと新春のコトホギに……」

「そんなところで昔懐かしいフラフープなんか持って、それがなんで新春のコトホギやねん」

「昔からよう言いまんがな。輪を持って辰年となす、て」

「それも言うなら、和をもって尊しとなす、やろ。この場合の尊しは尊しと読んだらあかんで。洒落にならへんから」

「ルビがないとさっぱりわかりまへんなあ」「和をもって尊しとなす、というのは、聖徳太子の有名な17条憲法や」

「ああ、笑福亭太子」

「笑福亭やない。聖徳太子。だいたいおまえら、辰年の辰て何のことかわかつとるんか」

「人をみくびんなはん。知ってまっせ。座るの反対でっしゃろ」

「おまえ……ほんまにベタなぼけするなあ。今時やないで、それは。辰ちゅうたらドラゴンのことや」

「ああ、結婚披露宴でカップルが乗って降りてくるやつ」

「それはゴンドラや。わしが言うてるのはドラゴン」

「ヌンチャクをびゅんびゅん振り回しながら、あちょーあちょーあちょーあちょー叫びまくるやつでっか。あちょーあちょーあちょーあちょーあちょーあちょーあちょーあちょー」

「もうええよ、ドラゴン」

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第20回:新春新作落語『次郎長三国志』

「それを言うてほしかったんです」
「どないいうたらわかるんや。辰というのは、つまりは竜やな。水に棲む竜をミズチ、野に棲む竜をノゾチ、天に棲む竜を天竜、家に棲む竜を家竜という」
「いろんなところに棲んでまんねんな」
「そや。竜はいろんなところに棲む。人間の体内にも棲んどるで。腹の中に棲む竜を腹竜という」
「腹の中に竜が.....考えただけで腹たつー」
「おまはんにしたら上出来の洒落や。我孫子武丸先生もほめとった。.....ところで長いこと顔見せなんだが、今、何やっとなねん」
「あんたの目の前にこうして座ってますけど」
「そうやない。どうやってご飯を食べてんねん、ちゅうてんねん」
「左手で茶碗持って、右手で箸持って.....」
「おまえ、こんなところで商売根問のネタやって枚数稼ごう思てもあかんで」

「あきまへんか」
「わしがききたいのは、おまはん、今、何の仕事しとんねんちゅうこっちゃ。また、ぶらぶら遊んどるんとちゃうんか」
「遊んでるやなんてとんでもない。ちゃあんと正業につこうと努力してまっせ」
「えらいやないか。何の商売や」
「当ててみなはれ。当たったらえらいわ。あんたがびっくりするような仕事でっせ。ヒントはね、上に『や』がつきますわ」
「やくざやろ」
「なななななななんでわかりましたん？」
「あほか。おまはん、自分のかっこ、見てみ。パンチパーマあてて、もみあげ伸ばして、サングラスかけて、白のダブルのスーツ着て、エナメル先の尖った靴はいて、牡丹に唐獅子の刺繍のある幅の広いネクタイしとるやないか。どっからどう見ても、やくざか総会屋か紳士録屋か地上げ屋やないか」

「大正解、大当たり。ピンポンピンポンピンポン」
「しゃあけど、またなんでそんなやくざな商売.....ちゅうか、やくざそのものになりたいんや。おかんが泣いとるやろ」
「わても女泣かすようになったか」
「古典的なギャグを言うな。やくざなんかやめとけ。はよ、足洗え」
「ああ、本所七不思議の一つでんな」
「おまえ.....ときどき何言うとなのかわからんこと言うな。なんやそれ」
「知りまへんか、『足洗え屋敷』。その屋敷で寝たら、夜中に天井から大きな足が下りてきて、『足洗えー』言いやりまんねんて。正体は狸のいたずらやそうですけど.....あんた、狸か？　そういうたら、顔がよう似たある」
「しょうもないこと言うな。とにかく、やくざなんかやめとけ」
「あのね、じんべはん、わてがなりたいのんは暴力団とか愚連隊とか、そう

いうのんとちゃいまっせ。れっきとした侠客、渡世人、義理と人情の男ですわ」
「おまはん、年明けにテレビで『次郎長三国志』見たやろ」
「(ギクッ) ななな何でわかりまんの」
「おまえらの考えることぐらいはお見通しじゃ。ほんもんのやくざはあんなとちゃうで。やめとけやめとけ」
「そうでっしゃるか。.....かっこよかったけどなあ、キヨミズの次郎長」
「あほっ！ あれはシミズの次郎長と読むんや」
「あ、そうですのん。わてはまた、清水焼きとか清水寺いうから、てっきりキヨミズやと思って.....。でも、キヨミズでもシミズでも、かっこよろしいなあ、次郎長親分は」
「あれは講談や浪曲でねじ曲げられた次郎長像や。ほんまはあんなええもんやなかったんや」
「へえ、そうですか」
「知らんのやったら教えたる。次郎長

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第20回:新春新作落語『次郎長三国志』

「というのは、実は人間やない。恐竜と鳥類の間の存在や」

「あんた、それ始祖鳥とちやいまっか」

「ようわかったな。これは冗談。しゃあけど、次郎長像がまちごうとるというのはほんまや。清水一家いうやろ。あれはまちがい。ほんまは清水内科ちゅう医者なんや」

「ほ、ほんまでっか」

「わしがこれまで嘘言うたことあるか？ あるか……」

「一人で何言うてまんねん」

「その内科医には子供がなかった。跡取り息子がどうしても欲しかった内科医は、近くの神社に行って、神様にお祈りをしたんや。どうぞ男の子を授けてくださいませ、とな」

「えらい非科学的な医者でんな」

「そんなことあるかい。今、日本に医者数は山ほどおるが、ほとんどが呪術医やで」

「ほ、ほんまでっか」

「わしがこれまで嘘言うたことあるか？ あるか……」

「なんで男の子でないとあきまへんねん。女医かてなんぼでもいてまんがな」

「女が医者になるのはむずかしいんや。なんぼ努力しても、縁がないとなかなか医者にはなれんもんなんや」

「へえー」

「縁女医、いうてな」

「にわかでっか」

「にわかです」

「あ、にわかじゃにわかじゃえらいこっちゃえらいこっちゃ」

「(はあはあ) 驚取りはもうええねん。とにかく、その医者は、跡取り息子が欲しいとその神社に行ってお参りをしたんや」

「あんたを信用せんわけやおまへんけど、その神社、なんちゅう名前です？」

「たしか、エール神社とかいうたな」

「にわかでっか」

「にわかです」

「あ、にわかじゃにわかじゃえらいこっちゃえらいこっちゃ」

「(はあはあ) そしたら、草木も眠る丑三つ時、その神社の本殿の扉がぎいーいーと開いてな、中から神さんがお出ましになり、その医者に向かって言うには、おまえの頼みをきいてやってもええけど、神さんに頼み事をするには、いけにえを捧げなあかんで、と」

「いけにえ？ えらいこと言いまんない。それで、その医者もあきらめよりましたか」

「なかなかあきらめんど。医者の中には、手を尽くして治療したけど結局助からなんだ死体やら、まちごうて殺してもうた死体やら、とにかく死体なんぼでもある。医者は、病院にとってかえして、そのうちの一つをかついで、また神社に戻ったんや。ほんで、その死体をいけにえに捧げたな。この死体を死体ようにしてもええで、ちゅうわけや」

「にわかでっか」

「にわかです」

「あ、にわかじゃにわかじゃえらいこっちゃえらいこっちゃ」

「(はあはあ) おまえと話ししてたら疲れるわ。すると、不思議なことに、一条の光が神殿の中からその死体に差した、と思うたら、みるみるうちに死体はバラバラになり、身体各部分がそれぞれ人間になった」

「そんなあほな」

「わしがこれまで嘘言うたことあるか？ あるか……。ま、とにかく、頭や胸や内臓や手足が一人前の人間になりよったんや。そのなかでも、腸が変身したんが、次郎長や。ほんまは次郎長やのうて、白腸ちゅうねん」

「清水の白腸でっか」

「そや。内科医は大喜びしてな、白腸を養子にして跡を継がそうとした。そんな白腸のところに、いろんな連中が集まってきて、彼を親分として立てる

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 20 回:新春新作落語『次郎長三国志』

ようになってきた。大政、小政、大瀬半五郎、尾張の桶屋の鬼吉、増川の仙右衛門、お相撲常、法印大五郎、大野の鶴吉、三保の豚松……」

「だんだん次郎長らしゅうになってきましたな」

「中に一人、胃潰瘍で胃を全部切除したやつがおった。胃を始末してしもうたんで、森の胃始末という名前になった」

「ほんまかいな」

「内科医も、ええ跡継ぎができた喜んでたんや。そして、白腸がお蝶さんという嫁はんを迎えたので、すっかり安心して、孫ができるのを待っていた。ところが、ある時、白腸が女物の着物を着て、頭に珊瑚でできた高価な櫛をつけてるのを見てしもた。これがほんまの白腸珊瑚櫛」

「にわかでっか」

「にわかです」

「あ、にわかじゃにわかじゃえらいこっちゃえらいこっちゃ」

「(はあはあ)もうやめとこ。にわかはこので終わりにしょ。息が切れるわ」

「そんな女のかっこして、白腸はおかまやったんですか」

「内科医もそう思た。ところがそうやない。実は、白腸は半陰陽……つまり、ふたなりやったんや」

「男でもあり女でもあるいわゆるアンドロギュノスですな」

「調べてみると、実は、嫁はんのお蝶というのは、白腸自身のことやったんや。お蝶やのうてお腸やったんや」

「……………」

「内科医は激怒した。跡取り息子が欲しかったのに、半陰陽では跡取り娘になってまうからな。ところがもっと驚くべきことに、白腸は妊娠しとったんや」

「ええーっ」

「月が満ちて、白腸は玉のような男の子を産んだが、残念ながら、産後の肥立ちが悪うて、白腸は苦しみながら死んでしもうた」

「かわいそうに……」

「これがほんまの白腸産後苦死」

「にわかでっか」

「もう、にわかはいええゆうとるやろ。白腸の悲劇はそれだけでは終わらんかった。死んだ白腸の身体を子分たちが八つ裂きにして、食うてしもうたんや。残酷やろ」

「ほんまに残酷でんなあ」

「これがほんまの次郎長残酷死」

「にわかでっか」

「にわかです」

「あ、にわかじゃにわかじゃえらいこっちゃえらいこっちゃ」

「えらいこっちゃえらいこっちゃ」

「えらいこっちゃえらいこっちゃ」

「えらいこっちゃえらいこっちゃ」

「えらいこっちゃえらいこっちゃ」

えらいこっちゃえらいこっちゃと言いながら2000年はあけてまいります。

おなじみの「白腸残酷死」半ばで失礼させていただきます。